



「笹川杯作文コンクール 2012」～中国語で応募～ 第6回（11月分）優秀賞作品

※原文に忠実に和訳しました。

※個人名の掲載については、本人の承諾を得ています。

経験してから考えた原子力発電のこと

遼寧省 鐘守玉

人の一生には、深く心に刻み後々まで偲ばれる運命の日というものがある。ある瞬間に見た画面やシーンは往々にして脳内で過ぎた日の追憶と分類され、深い霧の中に放り込まれてしまう。

その時、私は引き出しを片付けているところだった。引き出しの底から航空券の控えが見えた。そっと手に取ると、印刷された情報がはっきりと読み取れる。2011年03月11日、大連発仙台行き。あの尋常でない日々を引き戻されたような気がした。

航空便は早くに予約してあったもので、彼女と出発日の相談をした時からずっと、その日を待ち焦がれていた。ついにその日が訪れ、早々に片付けてタクシーで空港に向かった。渋滞のせいで、空港に着いたのは離陸のわずか二十数分前。搭乗したのは私が最後だった。着席してやっと落ち着き、深く安心して、彼女との対面に思いを馳せた。

12時30分、飛行機は定刻どおり着陸。ロビーに出ると、彼女をすぐ見つけることができた。1年あまり見ないうち、彼女は少しやつれていた。深く見つめ合ってから、彼女は恥ずかしそうに私の手を引き「行きましょう」と言った。それまでに想定していた場面はどれも現れることはなかった。

彼女に続いて電車へ。発車して間もなく、激しい揺れが始まった。「日本の電車はどうして海賊船みたいに揺れるの？」と聞くと、彼女は「違う、おかしいよ」と言う。彼女は焦りを浮かべながら四方を見回しだした。車内の人々が大声を上げ始め、彼女もあたふたとして、地震だ地震だと私に言った。安定して立ってられないまま彼女を抱きしめ、内心これは「幸運」だろうかと思った。来たばかりで地震に遭遇するとは。しかし私が出会ったこの「幸運」は百年に一度もない規模の大地震だったのだ。

本当に幸運だったのは、二人とも無事だったことだ。「不幸中の幸い」という言葉は、自分のためにあるようなものだった。

その後、私は中国大使館の助けで安全に帰国できたが、彼女は福島に留まった。私は帰国後ずっと福島の動態、彼女の周囲の生存環境に関心を向けていた。もし原子力発電所がなかったら、福島は今のようにはないと思う。福島県双葉町は第一原子力発電所から19.3キロしか離れていない。放射能漏れ事故の発生後、全町民が避難した。

そこには今でも災害発生時の情景が残されている。誰もいない児童遊園地、何も無い大通りを歩く孤独な犬、投げ捨てられた靴などの個人の品々…双葉町はチェルノブイリ原子力発電所に最も近い「ゴーストタウン」プリピャチそっくりに変わってしまった。まるで時間が静止したように、ただ孤独な哀悼の空気だけが残って今なおゆっくりと流れている。

人々は核の話をする顔色を変える。

原発事故にこれほどの破壊力があるというのに、どうして放棄できないのだろうか。多くの人々がこうした疑いを持っている。原子力事故に関係する資料を探してみたところ、原子力発電が使われだして以来、これまでに起きた大型の放射能漏れ事故は3回。米国スリーマイル島原子力発電所、旧ソ連のチェルノブイリ原子力発電所、そして今度の日本の福島原子力発電所の事故である。原子力利用の歴史50年のうち、メルトダウンの深刻な事故はこの3回だけで、全体的に見ると事故の確率はまだ低い。

他に重要な点が2つある。1つは原子力発電が高効率で、省資源であること。例えば、百万kW級の石炭発電所は1基で毎年約300万トンの原炭を消費する。しかし同等出力の原子力発電所で補充を要する核燃料は毎年わずか30トン。前者のたった十万分の一である。もう1つは、原子力がクリーンエネルギーであり、環境汚染が少ないこと。現在の環境汚染問題の大部分は化石燃料を使うことにより引き起されている。化石燃料を燃やすと大量の二酸化炭素、二酸化硫黄、窒素酸化物、埃が排出され、地球全体の気温が上昇し、酸性雨やオゾン層破壊が生じる。環境にとって極めて大きな脅威と損害をもたらすのだ。しかし原子力発電所では化石燃料を使わないため、こうした環境汚染を起こさない。

日本の地震と津波による原子力発電所の事故の後、多くの国が、日本の事故の教訓は吸収に値するものの、本国の原子力発電推進計画に今回の事故は影響しないと表明している。イタリア、スペインなどは原子力依存が減ることはないとしており、「食べ物がのどにつかえただけで食事までやめてしまうこと」はできないと強調している。

そう、飛行機の墜落事故があったからといって飛行機に乗らない訳にはいかないだろう。世界はエネルギーの構造的な不足とエネルギー供給の不確定性に直面している。つまり従来の鉱物エネルギーの市場では需給バランスが失われており、高効率、クリーン、安価なエネルギーの供給が不足しているのだ。経済が急激に発展している今の世界では、原子力発電への依存度がますます高くなっている。

原子力発電はパンドラの箱のようなもので、いったん開くと閉じられるものではない。私達のすべきことは、原子力をよりしっかりと掌握し制御して、明日の世界により多くの恵みをもたらすことである。